2024 年
（令和 6 年）
12 月 12 日

むつび

石井十次の会　会報

327 号

「孤児の父　　石井十次の教育理念に学ぶ」

高原町教育長　西田　次良

10 月 25 日付の宮崎日日新聞に、東京大学教授・本田由紀氏による次のようなコラムがありました。

> 現代教育では、教員の働き方が過重で長時間になっているため、なり手が不足する事態が悪化している。その背景には、学習指導要領や評価方法の負担の重さ、1 学級当たりの児童生徒数の多さがある。
>
> 余裕がなく、締め付けの強い学校の状況は児童生徒にも影響し、少子化が進んでいるのに、不登校や自殺は急増している。外国ルーツの子供は増えているが、対応は極めて不十分である。
>
> 学校では、きめ細かい指導が難しいことへの対処として、経済的に余裕のある保護者は、学校外教育に出資することで、子どもを成功のルートに押し込もうとする。一方それが難しい家庭の子どもには、放課後の学童保育さえ行き渡らない。
>
> 私費負担の大きさは高等教育でも顕著で、経済的な理由による進路の制約や、貸与型奨学金の返済が卒業後も長く若者にのしかかる。それは未婚化や少子化、人口減少の一因ともなっている。

このような現代教育が抱える課題を考えるときに、石井十次が残した教育の理念に学ぶことが多いのではないでしょうか。石井十次（1865 年–1914 年）は、日本初の孤児院である岡山孤児院を設立し、家庭や経済的な困難に直面する子どもたちに対して教育と生活支援を提供した人物です。十次は「人は皆神の子であり、その一人ひとりを大切にする」というキリスト教信仰に基づき、どのような境遇の子どもであっても平等に愛され、教育を受ける権利があるという信念を持っていました。この活動には、すべての子どもに公平な教育の機会を提供したいという強い意志が込められており、経済格差や家庭環境に関わらず子どもたちが学べる社会の実現を目指していたのだと思います。

十次の教育には「全人教育」の理念が体現されています。彼は孤児たちに対し、衣食住の提供に加え、学問や道徳教育を通して精神的な成長と人格の形成に重きを置きました。孤児院内で基礎的な学問を教え、また農業や家事などの実務教育を行い、生活力や自立心を養うことにも努めました。知識を得ることにとどまらず、子どもたちが他者を思いやり、社会に貢献

できる人間として成長できるよう支援することを目指していたのだと思われます。このような全人的な教育方針は、現代の教育においても心身の健全な成長を支えるモデルとして多くの示唆を与えてくれる気がしてなりません。

また、十次は孤児院の運営資金を確保するため、孤児たちによる音楽幻燈隊を編成して全国を巡り、寄付を募る活動も行いました。十次の理念に共感した多くの支援者たちがこれに賛同し、十次を中心に広範な支援ネットワークが築かれました。情報の未発達な時代に、このようなことが可能であったのは、十次の人間性と情熱が故に成し得たことでしょう。このようなネットワークの力は、地域や保護者、企業との連携が必要な現代教育にも通じるものであり、現代における地域学校協働の重要性を改めて示しています。

さらに、十次は孤児たちの自立心と社会に対する責任感を育む教育も重視しました。彼は孤児院で農業や家事労働の実習を行い、子どもたちが自分たちの生活を自分たちの手で支えられるようにし、「人生は自らの努力で切り拓くべきもの」という価値観を子どもたちに伝えました。こうした教育は、子どもたちが自ら考え、自立した社会の一員として成長するための力を養うものであり、現代の教育においても「生きる力」の参考となる重要な視点であると思います。

石井十次の教育理念に学ぶことは、現代の教育が抱える課題への解決策を見出す上で貴重な指針となります。教員の過重労働や教育格差、経済的制約などの問題に対して、石井の全人教育や地域連携の姿勢は、教育の在り方を再考するための示唆を与えてくれます。すべての子どもに平等な教育機会を提供し、経済的な背景や家庭の事情に左右されない豊かな学びを享受できる環境を築くことで、子どもたちが自らの力で未来を切り拓き、社会に貢献できる人間に成長するための社会を目指すことができるのではないでしょうか。

児童福祉の父と称される石井十次が築いた福祉文化と理念は、石井記念友愛社によって現代に引き継がれ、社会に根ざした支援活動として続いています。明治時代、福祉の概念がまだ乏しかった時期に十次が掲げた「天は父なり　人は同胞なれば　互いに相信じ　相愛すべきこと」という基本理念のもと、自然主義、家族主義、友愛主義、自律主義を基本目標として掲げ、多岐にわたる事業を展開されています。高原町にも「石井記念神武の家」があり、１５名の子どもたちが元気に学校へ通っています。

石井記念友愛社の活動は、縦割りで個々に機能するのではなく、関係機関や地域住民と一体となり、年齢や障害の有無を超えて支え合う「大家族的共生社会」の実現を目指されています。地域社会と手を携え、愛と信頼に基づいた共生の場を創ることで、すべての人が尊重され、支え合いながら成長できる社会を目指すという、石井十次の理念が現代に脈々と息づいているのだと思います

不思議なご縁

都城支部会員　　母子生活支援施設みどりホーム　中村健児

私が社会福祉法人石井記念友愛社の一職員として働かせていただくきっかけは、今から39年前に遡ります。当時、日本福祉大学社会福祉学部の学生で、卒業後の進路を決める時期で一度児童養護施設石井記念有隣園に職員募集の予定がないか問い合わせを行いました。その時は、残念ながら空きがなく就職先として宮崎県県民生協を受験しました。運よく3次試験まで合格し、内定をいただいていました。その後、しばらくして有隣園から職員の空きがでたのでどうですかというお話をいただき、生協をお断りして有隣園にお世話になることにしました。昭和60年4月のことです。生協を選択していたら今の自分はない訳ですので、縁とは奇なものだと感じています。

その後、4年間有隣園で住み込み勤務した後、実家で農業後継者として届け出をする必要があり、わずか4年で有隣園を退職することになりました。仕事は、幸い社会福祉法人山之口町社会福祉協議会に入職することができ、以来、市町合併を経て新社会福祉法人都城市社会福祉協議会で定年まで勤めることになりました。

社会福祉協議会で働いているときも、石井記念友愛社の情報は児嶋理事長の「ゆうあい通信」をいただいていましたので、いつも楽しみにしていました。恥ずかしい話になりますが、わずかとはいえ、4年間過ごした有隣園での生活の中で石井十次の信念や想いを学ぶ時間は十分にあったはずなのですが、それができずもったいない時間を過ごしたと後悔しています。

さて、令和3年3月に都城市社会福祉協議会を定年退職し、その後2年間再雇用で継続して働いた後、令和5年4月に児童養護施設石井記念有隣園に勤務することになりました。この経緯についても少しお話させていいただきます。都城市には、福祉関係の施設・機関が加盟する都城市社会福祉施設等連絡会という組織があります。その連絡会の代表に有隣園の宮城先生をお願い申し上げたところ、ご快諾いただきました。それがあって、私が都城市社会福祉協議会を退職する際にお声がけいただき、現在に至っています。本当に不思議なご縁だと感じています。34 年の時を隔てて、再び石井記念友愛社で働くことになったことも驚きでしたが、母子生活支援施設建設の準備を担うことになって責任と新たなことへのチャレンジに胸が躍りました。令和6年5月1日に宮崎県に6年ぶりに設置がかなった、母子生活支援施設みどりホームの運営がスタートしました。定員10世帯、ショートステイ2部屋の小規模な施設ですが、「子どもの最善の利益を保障していくために、母親の精神的・経済的な安定を支援していき、もって当該世帯の自立をサポートする施設」として機能できるよう成長していきたいと思います。

むつび編集委員として思うこと

石井十次の生家の庭には、友人　徳富蘇峰の書による記念碑が建立されている。徳富蘇峰は肥後藩郷士の子。熊本洋学校に学び同志社英学校に入学。その後中退。民友社を創設。「国民の友」「国民新聞」を発行。 最初は平民主義を唱えたが、その後国権主義へと転換した。

私は 9 月に高鍋町美術館で徳富蘇峰の書「伯夷頌(はくいのしょう)」を鑑賞した。 古代中国 殷の時代に「伯夷(はくい)」と「叔斉(しゅくせい)」という清廉潔白な兄弟がいた。兄弟は儒教では聖人とされる。

私は会場で「徳富」の名前を何度も見つめながら、2 人のことを思い出していた。

1人目は徳富蘇峰の弟・「徳富蘆花(ろか)」(明治の文豪)についてである。蘆花は少年時代に洗礼を受ける。同志社英学校に入学するが、その後中退。明治 22 年、兄の徳富蘇峰が経営する民友社に入社。 明治 31 年に国民新聞に連載した「不如帰(ほととぎす)」がベストセラーになる。 明治 39 年にはエルサレムを巡礼している。兄蘇峰とは長らく絶交状態だったが、昭和 2 年に 14 年ぶりに再会し和解。 その翌日に死去している。

2 人目は徳富蘇峰の父親で肥後藩郷士の「徳富一敬(いっけい)」についてである。

「ゆうあい通信」2017 年 8 月号(友愛バンドの君たちへ)の中にある一節より

熊本藩士の横井小楠(よこいしょうなん)が文明開化を担う人材養成のために作った「熊本洋学校」に小楠の門弟「徳富一敬」とその息子、徳富猪一郎(蘇峰)、金森通倫(みちとも)も入校している。その後、金森通倫が岡山教会牧師として、石井十次の洗礼者となり、徳富猪一郎(蘇峰)が石井十次の支援者となる・・・とあった。 なんと素晴らしいことだろう。蘇峰と石井十次とのご縁は、父親の徳富一敬からすでに始まっていたのだ。

私はむつび編集委員として、これからも色々な取材等で見聞を広めながら、次の方にバトンを渡す時まで、皆様にむつび原稿をお届けしたいと思っている。

参考資料　＊「ゆうあい通信」・・・石井記念友愛社　児嶋草次郎理事長による 1992 年以来連載されているエッセイ。
友愛社のホームページからご覧になれます。

(編集委員　徳地　順子)

方舟館からのお知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★ご寄付をいただきました(敬称略)

【宮崎市】皆内 康広　谷口 眞由美　荒武 真奈美

【西都市】小田切 美智子　川崎 年治

【木城町】松本 文勝　【神奈川県】浦 初恵

ここまでの掲載者は編集等の都合により 11 月 21 日までのものとしています。

★1 月の通信発送作業はありません。

★１１月２３日（土）今年も友愛社の「収穫感謝祭」が開催され、十次の会では、喫茶室で珈琲のサービスと、十次茶の販売をしました。また資料館にお見えになった方へのガイドも行いました。協力いただいた会員の皆さん、ありがとうございました。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。
㊡ 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
社会福祉法人　石井記念友愛社後援会
石井十次の会
TEL/FAX　0983-32-4612
メール　yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

巻頭は高原町教育長　西田次良様より玉稿をいただきました。ありがとうございました。

編集委員　徳地　順子